

前田家所蔵

『文鵠七十賀俳諧集』(仮称)について

Haikai at the Seventieth Anniversary of Bunjaku's Birth

Katsuhiko SETA

勢田 勝郭

本稿で採りあげるのは、私の故郷である和歌山県伊都郡高野口町大字名倉(当時の称呼では紀伊国伊都郡中組名倉村)の旧家・前田家に伝来する俳諧資料中の一つで、天保十三年(一八四二)正月に開催された文鵠こと前田文治郎の古稀の賀において巻かれた歌仙と、その際に集められた俳諧仲間が発句を収載したものである。

縦×横、二四・二×一七・二センチ、半紙・袋綴十九丁、表紙はなく、一丁表から本文が始まる。前半七丁の内容は、中和亭の序文の付いた「文鵠七十賀歌仙」一巻の後、文鵠の自賀、嚶鳥、李溪、鸞仙の賀辞と発句が続く。中和亭は、後に述べるように名倉連の指導者的立場にあつたと推定される柳吹の師で、喜志康親『紀州郷土 芸術家小伝』(昭和四年)には「市川徒鳴。通称を紋左衛門と云ふ。号を中和亭と称して美濃風一派の宗匠なり。今、其の歿年・享年を逸す」と記されている人物である。前田家には、彼の発句短冊が多く伝えられており、また近隣・河根丹生神社(注二)境内には「白梅や楮をさらす一在所」の句碑がある。嚶鳥は文鵠の三男・幸助、李溪は次男・源助と推定される(注三)。鸞仙については、不明である。

(注一) 伊都郡九度山町河根

(注二) 李溪が文鵠こと文治郎の妻子で、かつ嚶鳥の兄であることは、本文中の記述から確実。文治郎の三人の息子(徳次郎・源助・幸助)の中、長男・徳次郎は天保六年に死去しているので、

李溪が二男・源助、嚶鳥が三男・幸助と推測される。

続く第八〜十四丁は「名録」と題され、名倉連、妙寺連、新在家連、名手連、粉川連、日高藤井連、本府城西連の七つの俳諧社中から各人一句で集められた発句が、社中ごとに計六一句収められている。妙寺連は伊都郡妙寺村(注三)、新在家連は同新在家村(注四)、名手連は那賀郡市場村(注五)、粉川連は同粉河村(注六)、日高藤井連は日高郡藤井村(注七)、本府城西連は和歌山城下西部の俳諧社中で、当時、紀伊国内には美濃派塊亭門の壮大な俳諧ネットワークが構成されていたことが柏本史和氏によって明らかにされているが(注八)、名倉連もそのネットワークの網目の一つであつたことが窺える。

(注三) 現・伊都郡かつらぎ町妙寺。名倉から約四キロ西方の大和街道沿い。

(注四) 現・伊都郡かつらぎ町蛭子。もと大谷村の支村。名倉から約七キロ西方で、大和街道を北境として大谷村に接する。村内に庚申堂があり、そこに奉納された天保六年の俳諧扁額には、

本資料と共通する名前が多く見られる。序文は五橋翁(吉田風圭)、跋装は緑涛主人(池端風袋)

で、共に塊亭門下の高足である（「かつらぎ町誌」一一九三ページ）。同時期、同所には風袋と風圭の句碑も建立されている。前者は「木啄も耳たつ花の盛哉」、後者は「聞度に□□□心やほと、きす」（中三字難読）

〔注五〕現・那賀郡那賀町名手市場。名倉から約十五キロ西方の大和街道沿い。

〔注六〕現・那賀郡粉河町粉河。粉河寺の門前町。『新編大筑波集』を見ると、古く、定義、吉成忠益、且夕といった作者の活躍していたことが知られるが、それらとの関連は現在のところ見出すことができない。

〔注七〕現・御坊市藤井。道成寺の門前に当たり、また物資の集散地として繁栄した。

〔注八〕『和歌山県の俳句俳諧史』（平成十五年）

第十五、十六丁に墨付はなく、十八丁以後に正月廿日付嘸鳥宛江阿坊書状が付載されており、その書状の記述により、嘸鳥の依頼をうけて、江阿坊が板行のために清書したものであることが知れる。ただし、清書後も、歌仙各句の作者についての訂正や、採録句の入れ替えがなされていることは現存状態から知れ、この資料が板行に至ったものがどうかは今の所あきらかではない。実際に板行されたなら、当然、適当な書名が付けられているはずであるが、それも今の所不明であるので、本稿では取り敢えず「文鶴七十賀俳諧集」と仮称することとした。江阿坊は、『紀州郷土 芸術家小伝』に「土橋丁鶴。名は次郎兵衛、または次郎八と云ふ。俳号を丁鶴。別に江阿坊の号を有す。鞆葉舎と称す。若山田中町に住して岡崎屋と云ひ、俗に岡次郎を以って世に知らる。池端風岱の後を継いで二代の宗匠たり。海草郡岡崎御坊に葬る」と記されている（注九）。名倉連関係の俳諧資料には彼に添削・批点を乞うたものが多く、また短冊も多く伝えられている。

〔注九〕歿年が明らかにされていないが、安政三年五月の日付を有する「桃賀俳諧控」という資料に「江阿亡師」と記されているので、その少し前に死去していることが知られる。

前田家と名倉連・双松舎について

名倉は、紀ノ川中流域の一支流である田原川が紀ノ川の氾濫原と出会う所に発達した集落である。古く、高野山領伊都郡官符符莊三十六ヶ村中の一村であったが、そこはまた紀ノ川に沿った紀伊・大和を結ぶ交通ラインから、今日「町石道」と呼ばれる紀ノ川流域と高野山を結ぶルートが分岐する位置に当た

る近郷の要地であり、かつ交易の場所でもあったことは、地内に残された「城跡」「市場北脇」「市場南脇」の小字名からも窺い知れる所である。その地に、江戸時代後期、「名倉連」（注一〇）と称される俳諧結社が形成され活発な運動を展開していたことは、一時期全く忘れられた状態にあったが、前田西一氏を初めとする地元有志の方々によって、近年ようやくその実態が明らかになりつつある。その名倉連の中心メンバーの一人が俳号・文鶴こと前田文治郎であり、名倉連の活動の拠点が彼の居宅「双松舎」であった。

〔注一〇〕本書では、便宜的に「名倉連」に統一したが、文政期の資料には「双松連」の称呼を用いているものも存在する。恐らく初めは、内部的には双松連と呼ばれ、名倉連は対外的に用いる名称だったのではあるまいか。

前田家の屋号は辻本屋。古くより名倉に居住していたと伝えられるが、資料により活動が知られるのは文治郎の先代・嘉助からである。前田家過去帳によれば延享三（一七四六）年の生まれ。父は嘉八郎と言ったが十一歳の時死別。以後母に仕え家業に精励する一方、石門の心学を修業し、文化元（一八〇四）年、紀州公より「心学出精褒状」と『論語集解標記』一部を賜った。文化十（一八二三）年六月、伊都郡中組大庄屋に任ぜられ、同年十月、前田家は「地士」として「永代帯刀人」となった。文化十二（一八二五）年没、七十歳。

文鶴こと文治郎は、過去帳に弘化四（一八四七）年歿、七十五歳とあることから逆算すれば明和二（一七七三）年の生まれということになる。前田西一氏より聞く所では、嘉助の実子ではなく、那賀郡名手の「布屋」と伝えられる某家から養子に迎えられ、嘉助の長女・おくまを娶り家督を継いだ。心学にも父の業を継承して熱心であったことは後出の「文化十四歳心学の節触名前覚帳」や「天保六年心学控」より知れるが、何より俳諧を愛好したことは、本資料中の自賀に「道はつとめて今日の変化を知り、俳諧は遊びて行脚の便を求むるにもあらねど、塊老師の門に入りて風雅に遊ぶ事、横好きなるから、双松の二字を標号に玉はりしが」と記すとおりである（注一一）。三男二女があったが、長男・徳次郎は家督を譲られながら天保六（一八三五）年、四十歳で父に先立って死去したため、前田家は文治郎の手に再度委ねられることとなった。家督は、その後、文治郎の孫・嘉助（三代前と同名、元治二年歿、三十三歳）に譲られ、豊太郎（明治十七年歿、二十五歳）、友次郎（昭和十年歿、六十四歳）と継承された。友次郎は長く地元の郵便局長、学務委員等を務め、その事跡と人柄

については今も敬慕する者が多い。友次郎の嫡男が、田中角栄内閣で科学技術庁長官に任ぜられ、更に参議院副議長を務めた佳都男氏であり、その佳都男氏の嫡男が村山内閣で法務大臣を務めた現当主・勲氏である。

(注一一) 引用中の「道はつとめて、行脚の便を求む」の文は、支考が、宝永七(一七二〇)年の芭蕉十七回忌の法会に際し洛東・双林寺境内に建立した碑文中に見えるものである。文鶴はこれに先立つ某亥年(文政十年または天保十年)十月に京都見物の旅をしており、その時の紀行(白筆)が伝えられているが、彼は、その碑文を見て感激し、「合す手に有難泪時雨けり」と詠じている。

名倉に、大和街道に沿って商家が立ち並ぶようになったのがいつの頃からであったのかは明らかではないが、江戸中期、宝永六(一七〇九)の「葛城先達峰中勤式回行記」という資料からは、既に「名蔵ノ町」と呼ばれ、商業神たる恵比須神の勧請されていたことが知れる(注一二)。店舗を兼ねた前田家の居宅は、その東西に走る大和街道と名倉の産土神である八幡宮の門前から南北に高野政所・慈尊院への渡船場に至る道路が交差する所に位置する。「辻本屋」の屋号は、或いはそのような立地条件に由来するものかも知れない。その建物を「双松舎」と称することについて、地元には早く初代・嘉助の時代からのこととする見解があるが、先の引用のごとく、文鶴こと文治郎が、その俳諧の師・松尾塊亭から与えられた標号である。庭に二本の松の木が並んで植えられたことに由来すると伝えられるが、現在、奈良県香芝市に在住の前田晴子氏(現当主・勲氏の従姉)に拠れば、その二本の松は昭和初期まで残っていて、子供たちはそこにハンモックを吊るして遊んだとのことである。なお、勲氏は政界引退後生活の基盤を東京におかれていたので、名倉の邸宅の管理には、現在、分家筋で文治郎の五代の後に当たる西一氏が当たっておられる。

(注一二) 玉井昌士氏「郷土めぐり(名倉・浦の段)資料」(平成九年)

名倉連のメンバーについて

前田家所蔵の俳諧資料に記されている最古の年記は文政四(一八二二)年であるが、柏本史和氏『和歌山県の俳句俳諧史』(平成十五年)に拠れば、それよりも古く、文化十一(一八一四)年に板行された『更衣賀』には、「名手連」と「伊都名倉連」とが一括されて十五名の句が収められているとのことである(四三ページ)。調査の機会を得ないまま時日を逸し、その十五名の名をここに挙げるこ

ができないのが残念であるが、もしそこに文鶴の名があるなら四十二歳の時に当たる。なお、更にそれに先だち、寛政六(一七九四)年の丁ノ町村・江戸観音堂に奉納された「折笠千句集」扁額の作者中には名倉の住人として「卯月」[象笑]の名が見えるが(注一三)、その内容はいわゆる折句、笠付を集めた言語遊戯的な色彩が濃厚なもので(注一四)、伊都郡内に美濃派塊亭門の俳諧が普及する以前の作風と考えられ、その点で文鶴等の名倉連の俳諧に結びつくものではあるまい。

(注一三) 『かつらぎ町誌』一一九〇ページ。

(注一四) 「折句」は、三字の語が題として与えられ、それを五七五の最初に置いて発句を作る。扁額内の例句を挙げるなら、「ホノホ」に対し「堀端の軒へ引込む星月夜」とすることである。

「堀端」の「ほ」、「軒」の「の」、「星月夜」の「ほ」で、「ほのほ(炎)となる。また、「笠付」は、五七五の最初の五字が題として与えられ、それに各人が七五を付けて発句とする。扁額内の例句を挙げるなら、「恋こがれ」に対し「添ひ寝もならぬ内裏離」とすることである。

文鶴七十賀に先だつ天保六年(一八三五)八月に奉納された先述の「新在家村庚申堂俳諧扁額」には、名倉の肩書を付されて起石、柳吹、蘭甫、里夕、一窓の名が見えるが、その中、柳吹、里夕の二名は「文鶴七十賀歌仙」に共通しており、他の三名も恐らく名倉連のメンバーであったと思われる。

「文鶴七十賀歌仙」の連衆は中和亭、文鶴、李溪、梧山、秋英、五漣、湖柳、伊僊、巾吹、可全、甫三、子仙、翠葉、英志、琴泉、嚶鳥、三止、里夕、柳吹、三光、逸中、柳蛙の二十二名である。その中、前述の中和亭と李溪を除く二十名は、後半の「名録」にその名が見え、名倉連のメンバーであることが知られる。その中において、現存資料から推測して、力量的にもっとも高く評価される指導者の立場にあったのは、恐らく柳吹であったと思われる。『紀州郷土芸術家小伝』には「柳吹」の項があり、そこには、「那賀郡名手町の住人なり。市川徒鳴の門に入り、俳諧を巧みにして其の高足たり。師の跡を継ぐべき人なるも、遠隔の地に住するを不便として、自から之を受けず。一時その文台を預かり、後、之を中川桃花園に譲れり。当時、粉河或いは高野地方、塊亭派頗る振るへり」と記されているが、他方、同書「久保緑煙亭」の項にも、「字は柳吹。新助と称す。別号を乙鳥庵と云ふ。伊都郡名倉の人なり。俳句を善くせり」とあって、同時期、名手と名倉に二人の柳吹がいたことになる。ただし、これは、柳吹が若いころ名手に住んでいたが、後、活動の拠点を名倉に移した

と考えれば矛盾はなく(注一五)、二項は同一人を記述したものと考えられる。また、地元では柳吹について可貴氏の祖と伝えられ、『紀州郷土 芸術家小伝』に久保氏とあるのに一致しないが、婚姻その他の事情で数代のうちに姓が変わるのはよくあることだから、これも絶対的な難点とはなるまい。先に挙げた「新在家村庚申堂俳諧扁額」には「糞虫のかわく隙なき五月かな」の句が見え、慶応二年(一八六六)二月には、郡内・中飯降村城山神社にある塊翁句碑建立の発起人となり(注一六、明治八年(一八七五)には、それ以前、彼によって慈尊院境内に建立されていた塊亭句碑(妻乞の夢の一声夜の雉子)に並ぶ位置に、彼の「明ほのや雲とわかる、山桜」の句碑が建立されている。生年、歿年はともに明らかにしえないが、明治十三(一八八〇)年発行の句誌『道の光り』に「緑煙老師」として序文と「徳に富む道のひかりや冬牡丹」の句を寄せているので(注一七)、そこまでは生存を確かめることができる。

(注一五) 中飯降村は現・かつらぎ町中飯降。妙寺の東、北方に隣接する。句は「尊さよあちへもにほふ東風の梅」。側面に「慶応二丙寅如月」の日付があり、裏に、「発起人」として「緑煙亭柳吹」、「補助」として「葛南連」、「名倉連」、「鳩浦連」と記されている。「葛南連」は、現・かつらぎ町笠田中の旧家・草田家に資料が残されているので(「かつらぎ町誌」一一九六ページ、「つね女の米寿を祝う南紀葛城連賀草」)、その付近の作者による俳諧社中と推定される。「恋野連」は伊都郡恋野村(現・橋本市隅田町恋野)、「鳩浦連」は不明であるが、三者とも「文鵠七十賀俳諧集」には見えない社中であり、天保より慶応にかけて、美濃派塊亭門の俳諧ネットワークが、伊都郡内では柳吹を中心として更に密度を濃くしていることが窺われる。(注一六) 柳吹の名手から名倉への移住については、若い頃からの俳諧好きであった文鵠が、名手の某家から名倉の前田家に養子として迎えられたことが関連しているかも知れない。(注一七) 『橋本市史 下巻』四八ページ。なお、そこで緑煙老人について堺の人と記すのは、恐らく、字体の紛れから、彼が塊亭の門より出たことを誤ったものであろう。

柳吹以外の作者については、嚶鳥が、既に述べたように文鵠の三男・幸助と推測されること他に、「文鵠七十賀歌仙」のメンバーで、その伝の知れる作者はほとんど見られない。しかし、「文鵠七十賀歌仙」のメンバーの実態を知る手がかりが他に全くないわけではない。それが、同時期、名倉村内で活動していた先述の心学グループ関係の資料である。その一つは「文化十四歳十月心学の節触名前覚帳」と題されたもので、そこには「会輔」として「米屋吉兵衛、米庄、寄屋、山新、山久、油権、辻武、毛久、阪茂、栄蔵、若新、西長、

絹屋、島利、辻市、清水屋甚助、立貞、山藤、今城、加藤、新角、柏屋、中屋、長岡、藤新、柳助、碓屋伝兵衛、矢田善兵衛、地藏寺、西福寺」と三十の名称が記されている。もう一つは「天保六年心学控」と題されたもので、そこには「心学社中」として、碓屋伝兵衛、辻本屋市兵衛、布屋左市、油屋柳助、しまや利兵衛、西飯降屋長兵衛、平の屋久兵衛、為右衛門、新屋角兵衛、亀岡助次郎、志ま屋新兵衛、今城周平、西飯降屋藤兵衛、亀屋彦右衛門、中屋林蔵、升屋藤助、山家屋新七、寄屋新助、河内屋利助、米屋定七、山家屋与市、辻本屋武助、山家屋久兵衛、米屋庄助、名倉屋十兵衛、阪本屋茂助、木綿屋久兵衛、竹忠、足袋屋喜兵衛の二十九名の名が挙げられ、更に「未三月廿九日 善導人数」として、足袋屋弥右衛門、升屋藤助、木村屋甚兵衛、布屋源助、小畑屋千兵衛、碓屋善助、辻本屋林兵衛、米屋大蔵、今城養建、伏原・石井伝兵衛、西飯降屋藤兵衛、辻本屋定七の十二名が付加されている(「高野口町誌 下巻」八〇八ページ)。

前者は文鵠七十賀の二五年前の資料、後者は同じく七年前のもので、その間十八年の隔たりがあるが、両者の間には共通すると思われる名も多く存在している。そして、そこに記された屋号及び本名によって、それらが富商層を中心とする当時の名倉の有力者達であることは明白であろう。そして、ここで考えねばならないことは、近郷中の大村と言っても、『紀伊統風土記』(天保十年刊)に拠れば、当時名倉村の戸数は二七七、人口は八五二に過ぎないということである。そんな狭い世間で、同じく文鵠こと前田文治郎を中心にしつつメンバーを全く異にする心学、俳諧二グループが存在したと考えるのは些か不自然であろう。つまり、この二グループにはかなり多くのメンバーの重なりがあると考えられるのである。一例を挙げるなら、「文化十四歳十月心学の節触名前覚帳」に見える「矢田善兵衛」であるが、「文鵠七十賀歌仙」のメンバーである「琴泉」は、前田家蔵の『混吟千種』と題された資料においては、「矢田」の肩書が付されて句が採録されており、この両者は同一人(またはその縁者)である可能性が高い。もう一例、かなりはっきりした所を挙げれば、「天保六年心学控」の「未三月廿九日 善導人数」中に「辻本屋定七」の名が見えるが、彼が文鵠の娘婿・定七(次女・お直の夫、明治六年歿、五十九歳)であることは、まず間違いがあるまい。そして、その名は「文鵠七十賀歌仙」には見えないものの、前述の『混吟千種』においては、「塵塚も庭の景なり今朝の雪」「寒声や

繩手を幾度行戻り」二句の作者として「定七」と記されおり、名倉連の一員であったことが知れるのである(注一八)。更に言えば、「天保六年心学控」の「心学社中」の二番目に名の挙げられている「辻木屋市兵衛」は先代・嘉助の次女・トキの夫であるが(注一九)、その姻戚関係からして彼が文鶴七十賀の宴席には出るの当然のことであろうし、そして、もしそうなら、彼が俳諧に全く関心のない人物でない限り、歌仙の句のどれかが彼のものであるうとは当然許される推測であろう。更に推測するなら、先述のごとく『紀州郷土 芸術家小伝』には柳吹の称は「新助」とあるのだから、「心学社中」に「寄屋新助」とあるのが柳吹その人である可能性も考えられよう。個々の人物について一々の対応をつけるのははや不可能であるが、私は、名倉連のメンバーの多くが「文化十四歳十月心学の節触名前寛帳」あるいは「天保六年心学控」に名が見える中の誰かであると考えるものである。

(注一八) 本名で記されているのは、また俳号を持つ以前の初心者であったからであろう。『混吟千種』に採録二句というのは、秋英二十三句、里夕十五句、文鶴十三句などに比較して著しく少ない。

(注一九) 「地蔵寺・勢田正太郎家先靈調」に拠る。嘉永二年歿、七十一歳。なお「未三月廿九日 善導人数」中に見える「辻木屋市兵衛」は、彼の長男である。

名倉連の俳諧の作風とその評価について

蕉門十哲の一人に数えられる獅子庵・各務支考は、師の没後、芭蕉晩年の作風である「軽み」をもとに「俗談・平話」を旨とする一派をたてた。その一派は彼の郷国・美濃を中心に勢力を振るったので「美濃派」と呼ばれるが、その教えの平易さは地方の富農・富商層を主とする愛好者に歓迎され、支考自身の組織者としての能力と行動力もあって、一部から「田舎蕉門」と蔑まれながらも、たちまちのうちに全国各地に広まった。

美濃派では芭蕉を初世、支考を二世とするが、以後、三世・廬元坊里紅、四世・五竹坊(五筑坊)琴左と継承される。紀州における美濃派俳諧の隆盛は、二百石取りの和歌山藩士であった松尾塊亭が、五竹坊の門に入り、文台を許されて帰省したことに始まる。その門下である浦上風察、池端風岱、吉田風圭等が和歌山を中心に旺盛な活動をおこすと共に、日高・御坊地方では瀬戸周葉、

田端岑峨等、田辺地方では田村風邨、田所八悟等によって美濃派俳諧が広められ、紀州の俳諧は塊亭門の美濃派が席捲する観を呈するようになった。名倉連の活動もまた、そのような紀州における塊亭門美濃派俳諧の流行の伊都郡内における表象として位置付けられることは、今まで論じてきたごとくである。

美濃派俳諧に対する一部研究者の評価には極めて厳しいものがある。通俗・平板・凡庸・安易・マンネリズムと言った評語が、美濃派と言うだけでまともな検討を加えられることもなく貼り付けられてしまふ傾向が強い。名倉連を初めとする当時の伊都・那賀地方の俳諧が、そんな美濃派俳諧の末流であることは紛れもない事実であり、実際、本資料に見える句の中に、そのような評が当てはまるものが存在するのは認めざるを得まい。しかし、先入観を排して一々の句を検討してみると、意外なほど高水準の句に恵まれているように私には感じられるのである。今、「名録」中の名倉連の句を具体例として採りあげることとするが、次の二句は、私にとつてとりわけ印象的なものである。

①雲の峰は流れて涼し天の川 里夕

②虹を橋と見る葛城や花の浪 柳吹

①は、陰暦七月上旬の夜、積乱雲が湧き起こっていた日中の暑さが嘘のように、晴れた夜空に銀河が涼しく輝いている様を詠じた句であるが、「天の川」の語によって表現されるべき初秋の夜の涼しさが、「雲の峰」の語によって暗示される日中の暑さと対比されることによって、時間の経過とともに、より一層の爽涼感をきわだたせるように表現されている。特に「雲の峰は」と字余りに「は」を付加して「雲の峰」を強調しているのは巧妙で、この句が単に「雲の峰流れて涼し天の川」であったとしたら考えると、その差は明瞭に看取されよう。天の川を詠んだものとしては、芭蕉の「荒海や佐渡に横たふ銀河」の名句がある。それに匹敵するというのはさすがに身量に過ぎるであろうが、其角の「堀木ずる越えてもかよへ天の川」(続有磯海)、嵐雪の「真夜中やふり替はりたる天の川」(其便)などよりは、余程現代人にもそのよさが実感できる句ではあるまいか。

次に、②は、桜花満開の夕方、葛城山から吉野にかけて大きく虹が架かっている光景を、久米の岩橋の伝説を下敷きにして詠じた句である。他所の人には、伝説にすがって虹を橋と陳腐に見立てただけの句のように感じられるかもしれないが、名倉は紀ノ川(吉野川)流域北岸の町であるので、東北方に眺望

の利く地点から眺めると、左手に葛城山が見渡され、紀ノ川を挟んで、右手に吉野地方の山々が見える。地元の者なら、そこに大きく虹がかかっている光景を想像しさえすれば、この句がいかに実景に即した見事な出来のものであるかが即座に納得されよう。芭蕉の「なほ見たし花に明け行く神の顔」は芭蕉の名句中の名句であるから、それと並べることは出来ないにしろ、同じ久米の岩橋の伝説を下敷きにした句でも、『続境草』に見える「名月の夜や葛城の神慮」や、『阿羅野』に見える「かつらぎの神にはふとき庭火かな」という句と比較して段違いの出来であるのは、私のごとき地元の人間でなくとも、まず納得していただけのことと思う。

他にも、次のような句が挙げられる。

- ③ 乗り替へた駕籠にぬくみや春の雨 逸中
- ④ 飼牛の相場もたつや春の雨 梧山
- ⑤ 駒鳥鳴くや雪二三寸四寸岩 甫三
- ⑥ 見渡せば水の世界や五月雨 三止
- ⑦ 詔はぬ姿気高し白牡丹 伊儼
- ⑧ ③は、駘蕩とした春の雨の情趣を、乗り換えた駕籠の仄に残る先客の体温から微妙に感じとったものであり、④も、同じ情趣を、農作業用の牛の売買という村方の生活の話題をとりあげて表現しようとしたものであるが、共にそのねらいは十二分に果たされていると言えよう。③の句の感覚の繊細微妙さ、④の実生活に根ざした季節感、各々珍重すべきものであろう。また、⑤は、春の到来の遅い高野山麓の情趣を駒鳥の声と残雪によって聴覚と視覚を融合させて巧みに表現しているし(注二)、⑥は梅雨の長雨によって、水田の畔道が水没して一面の水世界となっている光景を大きく詠じたものであるが、これも、村の南方の低地に水田が広がっていた名倉の連衆には、ありありと実景に即してイメージできる句であったはずである。⑦もまた、庭に堂々と咲き誇る大輪の白牡丹の姿を描いて余すところがない。以上の七句を見るだけでも、名倉連の俳諧が通俗・平板・凡庸・安易・マンネリズムと言った評語だけでは決して片付けられない水準のものであることが知れよう。名倉連の句には、他にも
- ⑧ 章魚の這ふ蟹の垣根やそばの花 五漣
- ⑨ 獅子の間を開らけば庭に牡丹哉 英志

など、中々に優れた句がある。

(注二)「四寸岩」は、高野山麓の神谷宿から不動橋に至るルート上にあった岩。「止駘岩」とも記される。高野参詣路中の難所として知られ、『紀伊国名所図会』にも「鶴鶴の小尻とがめや四寸岩」の句とともに絵が載せられているが、⑤の句は、この句よりもずっと上出来ではあるまいか。名倉連以外の社中の句を見てみても、

- ⑩ 虚に吠る犬に出て見る寒さ哉 千峯(新在家連)
 - ⑪ 牛飼もつなぎ迷ふや野の錦 一方(名手連)
 - ⑫ 捨笠をつらぬいてあり芦の鎌 霞溪(名手連)
 - ⑬ 花守の花に気の付く夕部哉 玉水(粉川連)
 - ⑭ 夜学の眼しばらく耳へ郭公 梟来(粉川連)
 - ⑮ 雲浸す海の青さや小春風 似静(本府城西連)
 - ⑯ 須磨はまだ潮風さむし初桜 壺中(本府城西連)
- など、やや通俗的の気味はあるものの、十分に水準以上の出来と言えるであろう。特に⑬⑭などは、私にはよくできた句だと感じられる。
- また、以下に挙げる句などは、芸術的なレベルという視点とは別に、庶民生活の機微を詠じている点で、現代人には微笑ましく好意的に受け取られる句と言えよう。
- ⑰ うちとけた仲人口の夜長かな 柳二(新在家連)
 - ⑱ 乳の匂ふ外母の曠着や土用干し 似□(粉川連)
 - ⑲ 草餅に和らぐ春や嫁姑 為泉(日高藤井連)
- とりわけ⑱は、地元の俗語に「おばばどこ行く、一升二升三升さるさげて、嫁の在所へ孫抱きに」とあるが(注二)。そんな庶民の辛さを絵に描いたような、見事な発想の人事句ではあるまいか。
- 私にとって、名倉連の俳諧が興味の対象となるのは、何よりそれが、自分が生まれ育った地の先人達の営為である点にある。しかし、そんな私的な感慨を一切抜きにして、名倉連の俳諧の水準は「文政・天明期の美濃派末流の地方俳諧」という語から研究者が普通に予測する所よりは、はるかに高い所にあると言えよう。そしてまた、それらが全て当時のオリジナルな資料である点においても、前田家に伝えられた名倉連関係の俳諧資料は、江戸末期の地方庶民文化の遺産として、貴重なものであると総括することができよう。

(注二)『高野口町誌 下巻』六六九ページ

翻刻『文鵲七十賀俳諧集』(仮称)

※ ※ ※ ※ ※

名倉の柳吹告て日社中の

古俳文鵲はことし七旬の春

を迎えて寿筵を開き願

糸風友の賀章には松の

千代に寄せ竹の万代に祝す

寔に目出度誕辰なればハ彼

橋治に便して梓行の沙汰

に及ハんとすよつて是か序

詞を請ふ予堅く辞すれとも

ゆるさねハ孤燈をか、けて禿

筆を恥す斯申送りぬ

中和亭

国の杖曳けよ子の日の遊から

老も小松に若かえる野辺

面白ふ百千の鳥の囀りて

ちよつと硯に墨摺て置く

質店の隙を偷みて連歌とハ

命婦といふハ猫の事なり

かれ是とはや夕月の影さして

もふ馴れてある醯醢の口切

はなすさへ東に力む相撲好

一里二百は安ひ駕賃

御祓の勿体なさにもてあまし

俄な雨のはれるのもつい

蒔餌には礼をわすれて群る鳩

謬者の為にしのふ若君

及バぬか結句およふも恋なれや

文鵲

李溪(注二二)

梧山

秋英

五漣

湖柳

伊僊

巾吹

可全

甫三(注二三)

子仙(注二四)

翠葉(注二五)

英志(注二六)

琴泉(注二七)

「二丁裏」

「二丁表」

明行く空に虹のかけはし

開らひては見すとも花の誘ひ状

新参もの、名も新三郎

板の間も鏡のよふにふき立て

つい鯉節て祝ふ朔日

疱瘡もかるく、嵯峨の奥迄も

岩の狭間を落る流れの

耳洗ふ許由も見えず蟬の声

禿倉の名さへ高き松の木

勝公事に寄つて一樽もめる也

記録ハいつか古ひ年号

身に替えぬたからも今の貧乏に

見れハ見るほと広過た庭

木犀の匂ひも芬と月の晴

きぬたハ止んで鹿の遠鳴

粟飯を寢覚の里にもてなされ

世をこそ□れ□して□枕

白浪の只漫くくと果もなし

力あるたけ舞ひのほる鳶

麗に老せぬ宿の花咲て

霞汲ミ合ふ春の寿

嚶鳥(注二八)

三止(注二九)

里夕(注三〇)

柳吹(注三一)

三光(注三二)

梧山(注三三)

李溪(注三四)

五漣(注三五)

秋英(注三六)

伊僊(注三七)

湖柳(注三八)

可全(注三九)

巾吹(注四〇)

子仙(注四一)

甫三(注四二)

英志(注四三)

翠葉(注四四)

柳蛙(注四五)

泉(注四六)

里夕(注四七)

柳吹(注四八)

「三丁裏」

「四丁表」

「四丁裏」

「五丁表」

右歌仙行満座

自賛

道ハつとめて今日の変化を知り

俳諧は遊ひて行脚の便を求るにも

あらねと塊老師の門に入りて風

雅に遊ぶ事横好なるから双松

の二字を標号に玉はりしか其
松の葉の散り失すことし

〔六丁裏〕

七十の齡に逢えと行衛はいまた
健かなれハ猶蒼髯の白からん

事を恥らハすも

また欲はいつまで生の松の花 又松舎文鶴

〔六丁裏〕

父翁ことし七旬の春を迎え
られしを竹の一章をもて祝し侍りて

雪霜の障りも見えずかさり竹 息嚶鳥

名倉の里なる実父今年

古稀の春を迎えられ其身の

健かなるはいふも更に風雅ハ若き

より好める道なれハ例の五七五を

もていつまで生の松の花と自

讃し我弟ハ竹の千代こめて

いわぬぬれハ子は又雪髯霜

髯の梅を詠して猶萬歳

の寿を賀し侍る

色も香もかわらぬ梅の老木哉 名手李溪

文鶴老人の古稀を賀して

七十を八千世の芽とよ玉椿 鸞仙

〔七丁裏〕

諸君子よりしたしき祝章

を送り玉ハれと事繁けれハ

几上に残して爰には略す

名録

名倉連

雲の峰ハ流れて涼し天の川 里夕

ちるや松葉名も吹上の浜す、し 湖柳

〔九丁表〕

詔ハぬ姿気高し白牡丹 伊僊 (注四九)

菊の名ハ酒にも酌める節句哉 秋英 (注五〇)

長閑さや峰に動かぬ花の雲 巾吹

投網と小竹筒を抱て柳陰 三光

枯はてた草の実と見る霞かな 翠葉

恋猫やおなし思ひの縁の瘦 柳蛙

春駒や手綱ゆるして休む芝 琴泉

□鳥を飼ひつける田も鳴子哉 子仙 (注五一)

駒鳥や雪二三寸四寸岩 甫三

水と茶の栄耀はかりや冬籠 可全

章魚の這ふ蟹の垣根やそはの花 五漣

乗替た駕籠にぬくミや春の雨 逸中

見渡せは水の世界や五月雨 三止

獅子の間を開けハ庭に牡丹哉 英志

菖蒲茸松皮の屋ねやちり松葉 嚶鳥

飼牛の相場もたつや春の雨 梧山

虹を橋と見る葛城や花の浪 柳吹

物いわぬ花にもいふ山路かな 文楊

霧たつや不二のけむりの行衛かも 李水 (注五二)

稲守りのけらひか更てきりくす 桑落

鳴る秋に鳴戸静かやけふの月 中飯降蕉雨 (注五三)

新在家連 〔十一丁表〕

むら消の淡雪に香や梅の花 其扇

虚に吠る犬に出て見る寒さ哉 千峯

うちとけた仲人口の夜長かな 大藪柳二 (注五四)

小春日や遠見の雪も花こゝろ 市原佳柳 (注五五)

名手連

揚てある船や納涼の借座鋪 互嶺

牛飼もつなき迷ふや野の錦 一方

隣より香こそ我家え東風の梅 楽山

〔十一丁裏〕

其枝の影も小春や帰り花

冠志

養父入の土産や母え御所嘶し

山夕

捨笠をつらぬいてあり芦の鉗

霞溪

焼山に産家さかすか孕鹿

□月(注五六)

よごれ手て朝日おかむや植乙女

李溪(注五七)

打寄る浪は野分か尾花鮎

一來(注五八)

粉川連

公家領に住むて若菜の貢哉

箏賀

嗽する雪の雫や富士詣

鞍鶏

管揚て八幡拜めハほと、きす

伊潮

淋しさをひとつに実のる朝かな

梅雅(注五九)

乳の匂ふ外母の曠着や土用干

似□(注六〇)

谷深ふ春も届ひて匂ひ鳥

星朝

其行ハ愚痴からも出つ寒念仏

静寿

からけたる裾をおろせハあられ哉

亀友

駒に水飼へハ啼止む蛙かな

如動

花守の花に気の付く夕部哉

玉水

霞波て行ハ我家もかすみ哉

燕司

雪車ならて車に積むや淀の雪

柳枝

啼足らぬ声も風情や初雲雀

積湖雲

虫もまた穴を出兼る余寒哉

志逸

卯の花や桜から又後の雪

如梅

茅の輪からぬけて新にけさの秋

□涼(注六一)

月はれて数もよまれつ渡る雁

辛夷

夜学の眼しハらく耳え郭公

亀來(注六二)

諸方文通

日高藤井連

月ならて闇の枝折を水鶏哉

秀□(注六三)

草餅に和らく春や嫁姑

為泉

貫之は土佐にて喰んはつ鯨

佳青

十分の秋やこほる、稲の露

周白

本府城西連

雲隠す海の青きや小春風

似静

須磨ハまた潮汐風さむし初桜

壺中(注六四)

涼風や蓮の浮葉の裏も見せ

英水

(注二) 作者、「里夕」とあった上に「李溪」と朱筆の貼紙で訂正。

(注三) 「もてあまし」の「もて」、「持」とあるのを見せ消ち訂正。

(注四) 作者、「子仙」とあったのを「改翠葉」と朱で傍書。

(注五) 作者、「子仙」とあったのを「改翠葉」と朱で傍書。

(注六) 作者、「翠葉」とあったのを「改英志」と朱で傍書。さらにその上部に「英志」と墨書。

(注七) 「バ」の濁点あり。作者、「英志」とあったのを「改里夕」と朱で傍書し、更にその下に「改柳吹」と朱書し、さらに上部に「琴泉」と朱書。

(注八) 作者、「琴泉」とあったのを「改柳吹」と朱で傍書し、更にその下に「里夕」と朱書し、更に上部に「柳蛙」と朱書し、更に上部に「嚶鳥」と墨書。

(注九) 作者、「柳吹」とあった上に「三止」と朱筆の貼紙で訂正。

(注一〇) 作者、「三止」とあったのを「嚶鳥」と朱で傍書し、更にその傍らに「里夕」と墨書。「三止」の下部に「柳吹」と記すも墨減。

(注一一) 作者、「嚶鳥」とあったのを「三光」と朱で傍書し、更にその上部に「改琴泉」と朱書し、更に上部に「柳吹」と朱書。「嚶鳥」の下部に「柳吹」と墨書。

(注一二) 作者、「三光」とあったのを「逸中」と朱で傍書し、更にその上部に「改李溪」と朱書し、更に句の左側に「柳蛙」と朱書、その上部に「里夕」と朱書し墨減。最終的に、最初の「三光」が生きると判断した。

(注一三) 作者、「山」とあった上に「逸中」と墨書の貼紙。更にそれに「梧山」と朱で傍書。

(注一四) 作者、「夕」とあったのを「秋英」と朱で傍書し、更にその上部に「李溪」と朱書。

(注一五) 作者、「山」とあった上に「鵠」と墨書の貼紙。更にそれに「五漣」と朱で傍書。

(注一六) 作者、「英」とあったのを「巾吹」と朱で傍書し、更にその上部に「秋英」と朱書。

(注一七) 作者、「漣」とあったのを「可全」と朱で傍書し、更にその上部に「伊僊」と朱書。

(注一八) 作者、「柳」とあったのを「甫三」と朱で傍書し、更にその上部に「湖柳」と朱書。

(注一九) 作者、「僊」とあったのを「子仙」と朱で傍書し、更にその上部に「可全」と朱書。

(注二〇) 作者、「吹」とあったのを「翠葉」と朱で傍書し、更にその上部に「可全」と朱書し、それに「巾吹」を重ね書き。

(注四一) 作者、「山」とあったのを「英志」と朱で傍書し、更にその上部に「子仙」と朱書。
 (注四二) 「速鳴」の「鳴」、「声」とあったのを見せ消し訂正。作者、「葉」とあったのを「甫三」と朱で傍書。

(注四三) 作者、「三」とあったのを「英志」と朱で傍書。

(注四四) 作者、「全」とあったのを「翠葉」と朱で傍書。句本文難読。

(注四五) 作者、「蛙」とある所に「柳蛙」と朱で傍書。

(注四六) 作者名一字表記。琴泉のことか。

(注四七) 作者、「宗匠」とあったのを「里夕」と墨書の貼紙。

(注四八) 作者、「嚶鳥」とあったのを「柳吹」と墨書の貼紙。

(注四九) 句は「紅白もちりてはおなじなし島」とあった上に付箋で入替え。筆跡は江阿坊。

(注五〇) 句は「焼捨てた炭竈もあり山さくら」とあった上に付箋で入替え。筆跡は江阿坊。

(注五一) 句本文、一字難読。

(注五二) 句は「はつ雪や富士も裾野へ配りかね」とあった上に付箋で入替え。筆跡は江阿坊。

(注五三) 「中飯降」は伊都郡中飯降村。妙寺村の東、北方に隣接する。現・かつらぎ町中飯降。

(注五四) 「大藪」は伊都郡大藪村。現・かつらぎ町大藪。

(注五五) 「市原」は、伊都郡丁野町村(現・かつらぎ町丁ノ町)の東方の小名。

(注五六) 作者名、一字難読。

(注五七) 「し」、濁点あり。

(注五八) 句は「橋立や切れ戸は青き雪の朝」とあった上に付箋で入替え。筆跡は文鶴。

(注五九) 句は「古里に過たる秋や鹿の声」とあるのを張り紙で訂正。筆跡は江阿坊。「朝」と判断したが、誤読の可能性あり。後考を待つ。

(注六〇) 作者名、一字難読。

(注六一) 作者名、一字難読。

(注六二) 句は「春雨に昼も朧やなしの花」とあった上に付箋で入替え。筆跡は江阿坊。

(注六三) 作者名、一字難読。

(注六四) 「初桜」は貼紙。下の文字は判読不能。